

浅井 裕之(愛知)

三協立山株式会社 三協アルミ社 名古屋営業開発グループ

〒460-0008 名古屋市中区栄2丁目3番6号 NBF名古屋広小路ビル8F
TEL:052-265-8149 FAX:052-265-8196



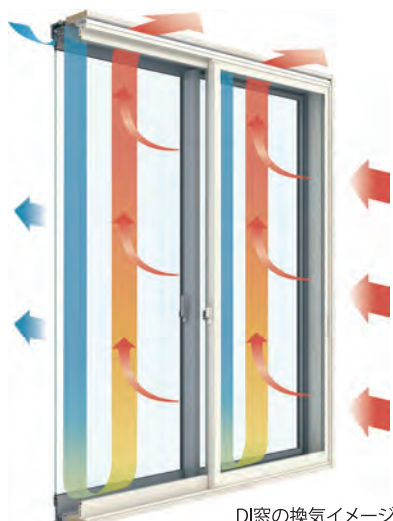
換気しながら高断熱を実現する、新しい窓「DI窓」。

当社は、「アルミニウム」を主たる材料として扱うものづくり企業です。建材事業・マテリアル事業・商業施設事業・国際事業の4事業を展開し、建材事業を担う三協アルミ社は、

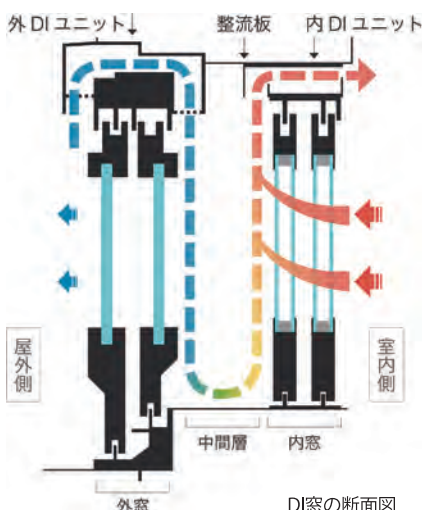
ビル・住宅・エクステリア建材の開発・生産・販売を行っております。建材市場では、2050年カーボンニュートラル実現に向け、窓の高断熱化に対するニーズが高まっています。

ビル建材商品の「DI窓(ダイナミックインシュレーション窓)」は、屋外側の外窓と室内側の内窓による二重窓とし、換気のための外気を二重窓の中間層に取り入れて空気の流れを作ること、窓から逃げる熱の移動を減らし、換気しながら高断熱を実現する新しい窓です。一般的に冬場の換気は冷たい空気がそのまま室内に入り込むため室温を下げてしまいますが、DI窓を使用すると、冬は二重窓の中間層であたためられた空気を室内に取り込むため、冬でも室温低下を抑えた換気が可能です。夏は二重窓の中間層で外から侵入する熱をやわらげるため、冬はあたたかく、夏はここよく過ごすことができます。

少しでも商品に興味がおありでしたら、お気軽にお問い合わせください。皆様からのお問合せを心よりお待ちしております。



DI窓の換気イメージ



DI窓の断面図

建築確認検査、住宅性能評価、

住宅かし保険、構造計算適合性判定、

省エネ適合性判定などの業務を行っています。



一般財団法人 愛知県建築住宅センター



CONTENTS

法人協会通信 64

三協立山株式会社 三協アルミ社 表紙裏
浅井 裕之

地域会だより 1

連載【隔月 全6回】建築とデジタル技術の承前啓後
第3回 - 古くて新しいデジタル技術(後編) - 2
水谷 晃啓第28回 JIA東海学生卒業設計コンクール2023
審査総評・講評 4
渡辺 隆・謡口 志保・金山 美登利・葛島 隆之・塩田 哲也
受賞者の声 9
遠藤 あかり・佐藤 直喜・松井 宏樹・牛田 結理・神谷 尚輝
審査に寄せて 10
奥井 康史三重発 建築ウォッチング
水都大阪の歴史と今をめぐる旅 -中之島周辺散策- 11
松本 正博連載:コンペ・プロポーザルのありかた ⑤
名鉄蒲郡線 西浦駅待合所 学生コンペ 12
伊藤 隆一保存情報 第260回
データ発掘:万足平の猪垣 14
谷村 茂編集後記 14
服部 昌也・矢田 義典

残暑広告 15

JIA本部総会報告 15
大瀧 正也JIA建築家大会2023東海in常滑:開催記念特集 04
大会プログラムは2部構成 16
浅井 裕雄

地域会だより 今後の予定

■JIA東海支部
・9/1 第3回支部役員会
・9/3 JIA東海住宅建築賞1次審査■JIA静岡地域会
・未定■JIA愛知地域会
・9/8 賛助会 企業PR会
・9/8 第4回役員会■JIA岐阜地域会
・9/19 第5回役員会 18:30~20:30
・9/23 JIA東海支部岐阜地域会2023「JIAの窓」講演会
「ゆっくりとなめらかに建築を考える」辻 琢磨 氏(建築家)■JIA三重地域会
・9/8 第4回役員会・第3回例会 (オンライン開催)

Bulletin Board

講演会

JIA東海支部岐阜地域会2023「JIAの窓」講演会

ゆっくりとなめらかに建築を考える

講師/辻 琢磨 氏 (建築家)

会期:2023年9月23日(土) 17:00~18:30

会場:岐阜ビル (岐阜市若宮町6-2-2)

参加費:無料(先着申込 40名)

CPD:2単位

■お問い合わせ・申込み/JIA東海支部 岐阜地域会

担当:北村(北村直也建築設計事務所)

メール:info@kitamuraooya.jp FAX:0584-92-3541

◎申込み締切 2023年9月9日

JIA に入会して

正会員

山田 恵隆(JIA愛知)
有限会社 建築計画工房

私はJIAの目的(建築家の職能理念に基づいた基準を遵守することにより公益を保護し、建築家の資質の向上及びその業務の進歩改善をはかることにより、建築・地域・環境の保全と創造及び建築文化の発展に貢献し、公益に寄与することを目的とする)に共感し入会をさせていただきました。一人の人間として、社会の一員として地域に対しどのような還元が出来るか模索しながら活動していきたいと思っています。

表紙 常滑の景色……⑥「陶芸家」

常滑では、産業系窯業(土管など)が中心的な焼きものでした。昭和に入り生活も豊かになると陶芸が広がります。若手の陶芸家集団は大きな陶壁やモニュメント制作などアート作品を生み出していきます。



表紙は、陶芸家の谷川仁さん。窯業課を卒業して、弟子入りその後、陶芸家として独立。若いときには陶芸家集団として街の陶壁など制作。谷川さんはいいました。陶芸は、お金は無くともはじめられる。土は足を掘り、釉薬は海に行き海藻を使えばよい。この海藻の釉薬を「藻がけ」と言います。日展入選を始め、長三賞、朝日陶芸知事賞など多数受賞。(※写真は藻がけの茶器)

浅井 裕雄(JIA愛知)
裕建築計画

古くて新しいデジタル技術(後編)

□デジタル技術利用黎明期の主要な源泉

山田学、月尾嘉男らによって「東京計画1960」から「大阪万博」に至る期間に推し進められた丹下研のデジタル技術応用の特徴を前回紹介した。そこでも触れたが、京都大学川崎清研究室や川崎研に在籍した笹田剛も丹下研と同じく大阪万博に参加し、根幹施設の設計に際してデジタル技術の導入を試みた。川崎研の試みについては、日本建築学会のWebメディア「建築討論」の中で、建築情報学技術研究WGが行った川崎清および笹田と同様に川崎研のコンピュータ利用を牽引した山口重之へのインタビューで明らかにされた。前回も紹介した1991年8月発刊の「建築雑誌」に掲載された笹田の建築学会受賞時の記事「建築におけるコンピュータグラフィックスの可能性追求に関する先導的業績」に加え、このインタビューから川崎研および笹田の試みの全体像が俯瞰できる。

建築情報学技術研究WGが行ったインタビュー集では、丹下研の山田や川崎研の笹田、山口同様に黎明期から日本の

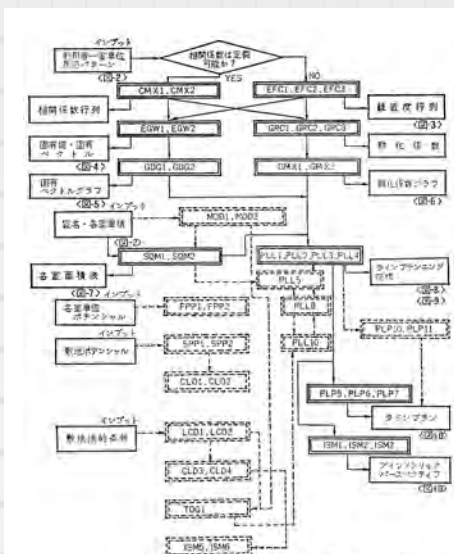
デジタル技術応用に貢献してきた両角光男(熊本大学)、渡辺仁史(早稲田大学)の5名(シンポジウム“CAD5”メンバー)に焦点を当てた聞き取りインタビューが記録されている。これ以外にも、海外から着目される黎明期の日本のデジタル技術応用の事例として葉祥栄の試みを明らかにしようとする岩元真明の論考などもあり、知られる機会を得ないまま埋もれつつあった重要なデジタル技術利用黎明期の源泉は、近年になって少しずつ掘り起されている。これらのインタビューや論考はいずれもWeb上で公開されているので、ぜひ参照して欲しい。

□京都大学川崎研デジタル技術応用の特徴

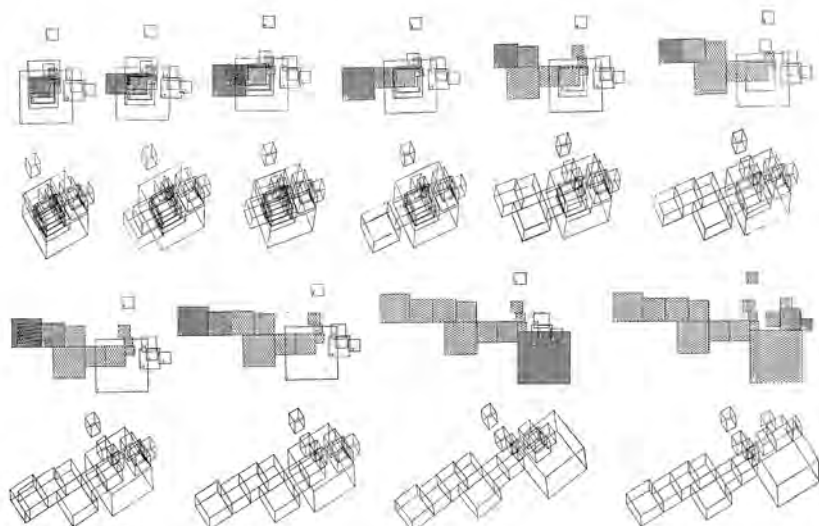
笹田の「建築におけるコンピュータグラフィックスの可能性追求に関する先導的業績」で、1968年に京都大学の大型計算機センターにグラフィカルディスプレイが導入され、3次元データの平面・立面・断面図への変換と表示、表示図形の拡大と縮小、図形データの追加・修正がブラウン管とライト・ペンの組み合わせ

から対話的にできるようになったことが紹介された。入力・出力が連続的に実行できフィードバックが対話的に行える状況への転換は、計算結果がその都度ドラム式のプロッターから出力されるバッチ処理状態であった時点からすると画期的なことであった。

この当時、デジタル技術よりも設計への関心が強かったと証言する山口は、インタビューにおいて「栃木県立美術館」(設計:川崎清[1972])の設計をしていた頃に、このグラフィカルディスプレイを用いてシングルラインの簡単なパースを笹田が描いていたことを証言している。この証言の少し前、1970年2月の建築文化において「コンピューターによる設計のシステム開発-PPSSの開発事例」では「和気町中央公民館」のために開発したシステムの成果が示された。PPSSはPlanning Process Simulation Systemの略とされ、フローチャートに示される、情報の選択、空間の関係づけおよび寸法づけの問題を扱う各サブシステムを統合するシステムとして紹介される(図1)。このシステムにインプット情報として室単位の名称、



(図1) PPSSフローチャート



(図2) PPSSによって出力されたブロックプラン

面積、使用者ごとの使用・非使用のパターンの処理が行われ、各室単位のブロックプランが(図2)に示されるように、ラインプランとアイソメトリックパースペクティブで出力される。建築スケールであり扱われるデータの違いがあるものの、人間-機械系が重要視されている点、各サブシステムを統合するシステムの関係に対する概念など、丹下研の「URTRAN」の開発において目指された点と共通しており、どちらも当時のサイバネティクス理論を背景としていたことが伺える。

□丹下研と川崎研の人的交流

大阪万博の根幹施設の設計に川崎清が参加しただけでなく、西山卯三が丹下と共同で会場マスタープランを計画しているように、開催地の関西を代表する京都大学と東京大学は、万博という国家プロジェクトの実現にむけて協働関係にあった。山口は先に紹介したインタビューの中で、博士課程在籍時に丹下研に設置された根幹施設の設計チームの一員として参加し、東京大学 高山英華研究室メンバーを含んだ丹下チームと協働した際に、丹下研のデジタル利用を進めた山田と出会ったと証言している。山口がそこで目にし、パンチカードにデータやプログラムを打ち込む手伝いもしたというのが、丹下研において山田らが行っていた大阪万博会場の入場者予測のための流動シミュレーションであった。

菅田が山口と同時期に(あるいはそれよりも前に)、この流動シミュレーションを目にしていたかは定かではないが、その当時、山口よりもデジタル技術に関心があり先輩でもあった菅田がこのことを見聞きしていない方がむしろ不自然な状況だっ

たことは間違いない。このようなことから、山田らの流動シミュレーションを当初から菅田が知っていた可能性が高いが、先に紹介したように同時期に菅田が対象としていたのは都市ではなく建築デザインのオートメーション化の作業であった。

その後、菅田はCADなどのソフトウェアやシステム開発に加え、ディスプレイやカラープリンタといったハードウェアに関連する研究開発を大阪大学において推し進めていった。60年代の試みから20年間の間の各々の活動を追うと、丹下研の山田は都市計画において、川崎研の菅田は建築デザインに応用可能なデジタル技術開発をハードとソフトの両面から行っていったことがわかる。

□デジタル技術応用の承前啓後にむけて

1980年5月に日本建築学会において電子計算機利用委員会が発足された際には、黎明期のキーパーソンとして名前をあげた太田、菅田、山田が参加しており、これまでに紹介した各源泉は20年の時を経た80年頃において合流し、我が国におけるデジタル技術応用の主流をつくっていったことがわかる。よく知られるように1980年代はCADが普及し、デジタル技術応用への関心が一般的になった時期であり、こうした社会的な変化が学会の委員会という形で合流するきっかけとなったと考えられる。

IT技術の革命期と位置付けられることが多い1995年以降になると、デジタル技術の発展が建築分野におけるコンピュータ利用を加速させた。今日ではBIMをはじめとした設計ツールとして広く普及し構造計算や日影なども含めた環

境シミュレーション、生産・施工管理においてより重要なツールとなっている。95年以降の早い時期にこうした試みを実践した人物として渡辺誠を、2010年以降に着目されたBIMを一早くデザインツールとして用いた人物として山梨和彦をあげることができる。早い時期から今日のこうした領域をリードするのは池田靖史で、コンピュータを用いたデジタル・デザインの手法を理論化し、それを実践している。先にも紹介した建築情報学会は池田らが中心となって既存の学术界や産業界から幅広く知見を集約し共通知識の体系化に継続的に取り組むことを目的に2021年に設立された学会で、建築情報学に関する学術的な地平をより展開する活動が継続される。

建築情報学会ではデジタル技術教育活動も積極的に行われており、教本などの書籍もなくWeb上で公開される海外の取組みなどから独学で学ぶしかなかった時期と比較すれば、技術習得のハードルは各段に低くなった。また、Pythonのようなインタプリタ型のコンピュータ言語が普及し、初等教育のなかでもプログラミングが扱われるようになった。黎明期のように機器毎に機械語で書くという限られた専門性だった頃から比較すれば誰でも簡単にコードが書ける時代となり、最近注目されるChatGPTなどをうまく使えば、適切なコードをAIによって生成することもできる。このように、建築分野におけるデジタル技術の承前啓後を誰もができるようになった。

次回以降は、承前啓後の一助となることを期待し、筆者がこれまで実践してきた事例を紹介していきたい。

※(図1・図2) 出典建築文化1970年2月号p.95, 98

水谷 晃啓 MIZUTANI Akihiro

建築家。M2A主宰。豊橋技術科学大学 准教授。博士(工学)。1983年生まれ。2013年芝浦工業大学大学院博士(後期)課程修了。2009年隈研吾建築都市設計事務所。2010~14年SAITO ASSOCIATES。2013年芝浦工業大学博士研究員。2014年~豊橋技術科学大学、東京電機大学、芝浦工業大学非常勤講師。

豊橋技術科学大学大学院 准教授
M2A主宰
博士(工学)・一級建築士

水谷 晃啓



第28回 JIA 東海学生卒業設計コンクール 2023

5月13日(土)に「第28回JIA東海学生卒業設計コンクール2023」が開催され、受賞作品が決定いたしました。審査結果と講評、受賞者の声などを掲載します。

○【金賞】	「同窓会アパートメント -大学同窓会による新しいコミュニティのかたち-」	遠藤 あかり (金城学院大学)
●【銀賞】	「山を建てる」	佐藤 直喜 (名古屋工業大学)
●【銅賞】	「循環する都市の履歴」	松井 宏樹 (名城大学)
●【銅賞】	「水の循環で生まれる暮らしの環 -上下水道から自立した都市の住まい-」	牛田 結理 (名城大学)
●【銅賞】	「庁舎建築再考」	神谷 尚輝 (名城大学)
【入選】	「建築と回復 -多様性と差異を生む反復手法-」	伊藤 亮太 (名古屋工業大学)
【入選】	「新雨池の縁 -住み開きする御器所長屋の提案-」	萩原 裕佳 (名古屋工業大学)
【入選】	「経年美を辿る -旧・宇治川電気志津川発電所の遺構の活用-」	井上 祐紀 (名古屋工業大学)
【入選】	「Architectural UPCYCLING -最終処分場から創作活動拠点へのリバース・コンバージョン-」	浅田 慎伍 (名古屋工業大学)
【入選】	「みまもりあいのミライ -元漁師町から次の世代へ-」	永井 里奈 (名古屋工業大学)

審査員長



渡辺 隆

渡辺隆建築設計事務所

審査員



謡口 志保

ウタグチシホ建築アトリエ

審査員



金山 美登利

モヴ構造設計

審査員



葛島 隆之

葛島隆之建築設計事務所

審査員



塩田 哲也

日建設計

審査総評

コロナ禍を経て開催された第28回JIA東海学生卒業設計コンクールは、オンライン(1次審査)と対面(2次審査)併用した、新しい開催方式となりました。

今回の集まったのは16作品(昨年は22作品)、年々応募数が減少している状況は気になるところですが、少数精鋭、レベルの高い作品が揃い刺激的な審査となりました。

1次審査は、4月25日。5人の審査員の皆さんが、事前に応募作品を読み込んだ上でオンラインにて議論を交わしました。投票の結果選出されたのは10作品。廃棄物やエネルギーなどの環境問題・まちづくり・庁舎などの公的施設等、今年はテーマの偏りはなく、バラエティに富んだ作品が並びました。

2次審査は、5月13日。久しぶりに応募者と審査員、運営者、関係者全員が会場に集まるのが出来ました。直接、熱のこもった



2次審査風景

発表を聞き、大きな模型を囲んで熱い議論が交わされました。

その後、投票によって上位5作品を選出し、更なる質疑回答を経て、金賞1・銀賞1・銅賞3作品を決定しました。

私は、卒業設計というのは、4年間建築を学んで湧き上がった「ワクワク」や「モヤモヤ」に、自身のパーソナリティ(生まれ育った環境や趣味趣向など)を掛け合わせる行為だと思っています。それが純粋に表現さ

れている作品にはリアリティがありますし、可能性を感じます。

今回のコンクールでもそのような作品が多く、楽しく審査させていただきました。ありがとうございました。

ここで皆さんが生み出した作品は、現時点での集大成であると同時に、数ある通過点のひとつでもあります。受賞された方も惜しくも漏れた方も、応募に至らなかった方も、これをステップに、次のステージでまた建築づくりに取り組んでいただきたいと思います。

共に頑張っていきましょう。



審査員長 渡辺 隆

➤ 金賞 ◀ Gold prize

「同窓会アパートメント」-大学同窓会の再評価による新しいコミュニティのかたち- 遠藤 あかり (金城学院大学)



【講評】

在学生とその大学出身の高齢者が共に住むアパートメントの提案。

同窓生、しかも大先輩と日々暮らすというのは、どういふものでしょうか。失礼ながら、私だったらちょっと耐えられない気も…。私にとって、頼りになる同窓の先輩とは、いつでも会いに行くことができるが実はちょっと恐れ多い存在で、隣同士に住むよりももう少し距離感を感じています。

と、少し疑問に思うところもあったものの、よく練られた完成度の高い作品でした。まず「同窓会アパートメント」という作品タイトルが計画を良く表しているうえにユーモアもあって絶妙。

計画地は大学近郊の通学路沿いに細長く接するエリア。道路沿いに居室から切り離された窓のある外壁を多孔質な塀のよ

うに設置することで生まれた中間領域は窓辺空間とネーミングされ、ギャラリーや工房が置かれる1階では街との接点になり、居住エリアである2・3階では、街と適度に距離をとるバッファになる。一つの単純な操作が様々な効果を生み出しており、見事でした。

タイトル・コンセプト・配置計画・平面計画・断面計画・・・一貫性を明快に感じられることは、どんな設計行為において大切で、なにより「同窓」という言葉に自分なりに魅力を感じ、建築をつくるアイデアになり得ると手ごたえを感じた瞬間があったであろうと想像すると、「やっぱり、建築を考えること作ることは楽しいよね!」と、嬉しかったです。

今回の卒業設計で感じ取った様々な刺

激的な感触を忘れず、これから魅力的な建築を生み出して行ってほしいです。

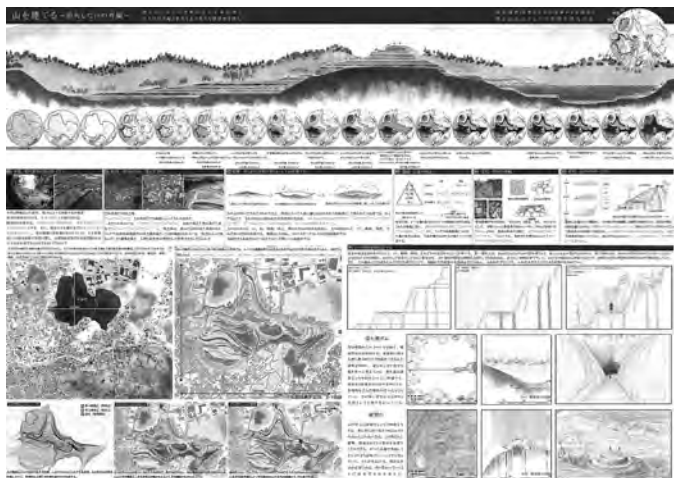
話しは戻りますが、世代を超えて、同窓生が集まって住む。うーん、私だったらそこどのような設定を与えたらあり得るのか、2次審査から数か月経った今でも時々考えています。1階のオープンスペースの運営や居住スペースの管理などを在学生と高齢者が一緒になってやっていくとか。寮生と寮長の関係の拡張?そして文字通り窓は共有できるのか?

家族より遠くて他人より近い「同窓生」という存在。とりあえず久しぶりに大学時代お世話になった大先輩に連絡でもしてみます。

審査員長 渡辺 隆

⇒ 銀賞 ◀ Silver prize

「山を建てる」 佐藤 直喜 (名古屋工業大学)



【講評】

「山を建てる」は、愛知県瀬戸市の窪地となっている採土場に、建設土を埋戻す事によって山を計画するという提案である。ここでは、「建築としての山、ランドスケープとしての空間」が設計されている。山を計画するにあたり素材は建設残土を用いるのだが、残土のリサーチが魅力的である。例えば、人間にとっては透水性があり利用しやすいが植物にとっては保水力が無く利用しにくいもの、あるいは

はその逆など、人間が定めた残土の階級を植物の観点からも評価し素材として捉えなおしている。種別ごとに評価しなおした土の再配置によって平面・断面計画が為された建築としての山が計画されている。具体的には、山頂(ピーク)、尾根、沢、池など、山を構成するエレメントを表面下の土(礫質土・粘性土・泥土など)から計画している。まるで、基礎や地盤改良から建築を計画するようにして、山に構造を与えて建築化する。その山のエレメントに囲まれ、空間化されたランドスケープ(落ち葉ダム・行き止まりの谷・大きな池・遺構と広場・二つの池と橋・禿山と結節点・あいだの谷・展望台)は、必ずしも人の為の居場所を作るのではなく、時間を含む大きな環境を作っている。

本作品は一見すると、建築の提案ではないように見えるかもしれない。しかし、配置図・平面図・断面図・立面図という建築表現を用いて、歴史・材料・構造・環境といった建築的なアイデアによって構想された作品である。その建築的構想力と精度の高いリサーチと計画を評価した。

審査員 葛島 隆之

⇒ 銅賞 ◀ Bronze prize

「循環する都市の履歴」 松井 宏樹 (名城大学)



【講評】

中川運河を基軸に形成された工業用地の陸の動脈線として計画された「南方貨物線」の高架廃線を地域住民の生活に活かそうと計画されている。工業の減少により住工混在地域が増え、「南方貨物線」も未完成のまま廃棄物となっている。分断⇒売却⇒撤去が進み巨大構造体の安全性への懸念、景観への影響も良いとは言えない。経済活動の様相はめまぐるしく変化し、膨大な工事費を注いだにも

関わらず役目を果たさずに姿をさらしている状況に言葉が詰まる。

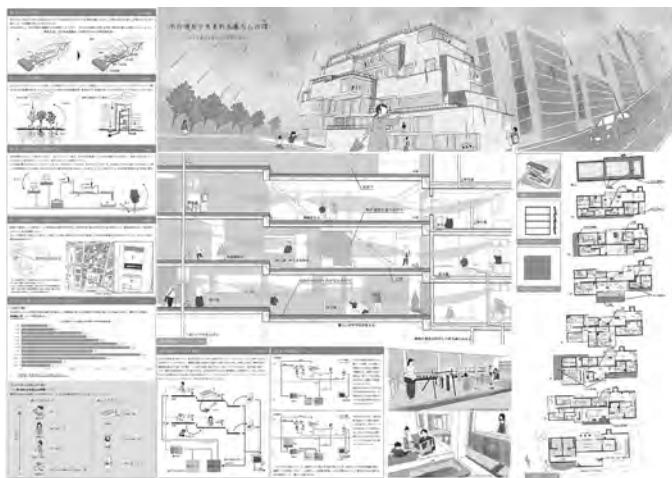
松井さんの計画は、家庭ごみ、産業廃棄物⇒処分という今のごみ処理の流れを家庭ごみ、産業廃棄物⇒住民による分別、再利用、ストック⇒処分とすることで地域住民参加型のごみ削減、地域活性化を狙い、その拠点として貨物廃線高架を活用しようという計画である。廃線高架を利用することで建設費を抑えられることが新しいゴミ処理のシステムを始動させるハードルを下げ、用途も構造体に合致している。廃棄物の資源化、処分量削減でSDGs活動をしながら建設ストックを再利用するというカップリングに可能性を感じた。一方で地域を縦断する敷地で建築的な計画・デザインについて盛り込みたいアイデアが散乱していて全体像が掴みにくいところがあった。

建築ストックを維持するためにお金を生み出す場に変換するのでは無く、生産・消費の経済活動(金銭)から、生産・消費しない経済活動(社会活動)へ変換する。このような問題に建築はどのようにアプローチしていくのだろうか。

審査員 金山 美登利

銅賞 Bronze prize

「水の循環で生まれる暮らしの環」—上下水道から自立した都市の住まい— 牛田 結理 (名城大学)



【講評】

上下水道に頼らない水の循環システムをもった名古屋都心の集合住宅プロジェクトである。近年、河川を流域全体でみるといった視点が見出されており、水を部分ではなく源流から河口まで一続きとして捉えると、本提案は都市における小さな流域として見立てることができ、その流域のさまざまな場所において人と水とが関わる多様な風景を想起させられる。

本提案では、名古屋市雨量や水の使用量、使用目的による水の種別などが具体的に算出された上で、建物の落差を利用したろ過のしくみや雨水タンク、循環タンクなどのシステムが緻密に計画され、前述した風景を支えるテクニカルな裏付けが高く評価された。また、循環タンクに十分な水が溜まった際は、1階の大浴場がまちに向けて開き、住民以外もこの水の循環を享受できるといったしくみも好感がもてる。

次に、ここではシステムの提案に留まらず、水の流れがインテリアとして可視化されている点も評価したい。都市において暗渠になりやすい水路が、壁や床、開口部など他の建築要素と等価に扱われると同時に、住宅内に動くものと動かないものといった対比を生み出し、新しい建築空間を提案している。その一方で、私たちの都市生活が水に及ぼす影響を強制的に意識させるといった挑戦的な側面があり、水路のまわりで住民が牧歌的に過ごす状況だけではない可能性を孕んだおもしろさもある。

最後に今後の課題として、隣接する白川公園との接続や、同様のシステムをもった集合住宅が建ち並ぶ都市への展開を期待したい。

審査員 諷口 志保

銅賞 Bronze prize

「庁舎建築再考」 神谷 尚輝 (名城大学)



【講評】

庁舎という建築タイプに一石を投じる提案。大型の「ハコモノ」を脱し、1～2層の小規模建屋の群造形としてまとめている。現況を変えようとする作者のチャレンジと、その価値観をぶれなく建築空間に描き出したことを高く評価したい。

高木、水景、地面の起伏といった既存の公園にある要素を空間づくりに活用していることや、木造コアとテント幕による軽快な建屋を基

本ユニットとしたことなど、作品を通して優しく慎ましい手法で統一した点が、作者の意図をより鮮やかにしている。

区役所が移転することの影響が敷地外にも及ぶと考え、アクティビティの変化や街の成長などを考慮して建設フェイズの提案をしている点はユニークだ。

またハードウェアの循環を考えたのも良いと思う。一度に全体が完成することを目指さず、社会変化に増築減築を繰り返して適応していくという思想も、前述の建築の成り立ちに良くフィットしていて説得力がある。

今後は、提案で説明されていない点について、答えを準備し、提案を補強してほしいと思う。例えば、各課の連携強化という課題に建築でどのように応えるか、身近な機能はまとめる必要はないか、多様な来訪者の動線を踏まえた際に適切なのはどのような配置か、その案内性はどうか、被災時の使われ方を想定した場合に必要な性能・機能は、など。

これらは現在の庁舎設計で求められる一般的な要求なので、これらに的確に応えることで、新規性の高い提案は魅力を一層高め、実現に近づけることができると思う。

審査員 塩田 哲也

⇒ 入選 ⇐ 「建築と反復—多様性と差異を生む反復手法—」 伊藤 亮太 (名古屋工業大学)



【講評】

72年分調べたという「反復手法」の類型化・整理にはじまり64個のモデル作成に至る部分の価値は高いと思う。世の中の建築は経済性を重視されることが多く、大規模なほど反復デザインを避けられない傾向にある。それは都市の中心部において人間主役の空間を目指す際に障害になっていることが多い。その解決としてこの研究は頼りになるだろう。

今後も発展させ、いつか実務に役立ててほしい。

設計部分について賛否が分かれた。具体敷地の与条件で作例を示してほしかったと感じる。一方で純粹さを追求した作者の狙いもよくわかる。両方あれば説得力が高まったのではないかな。

審査員 塩田 哲也

⇒ 入選 ⇐ 「新雨池の縁—住み開きする御器所長屋の提案—」 萩原 裕佳 (名古屋工業大学)



【講評】

歴史を伴う場所性と高低差ある地形を丁寧に読み解き、現代版長屋を既存市街地に挿入することで新たなまちなみ景観を提案した力作である。ここでは耕地整理によって都市化された場所が衰退していることをうけ、現代の住まい方・商い方を敷地にフィットさせ、周辺地域と連動しながら再び都市化させようとするねらいがみられる。具体的

には、長屋2間+隙間1間といった間口の反復に対して、地形に沿った平面計画や軒高さを自由に設定する手法を特筆したい。まちなみとしての統一感とそれぞれの場所での個性や楽しさが共存する本提案からは設計者としての力量の高さが伺えるため、今後の活躍を期待したい。

審査員 謡口 志保

⇒ 入選 ⇐ 「経年美を辿る—旧・宇治川電気志津川発電所の遺構の活用—」 井上 祐紀 (名古屋工業大学)



【講評】

人が普段立ち入ることのない「旧水力発電所」から「経年美を鑑賞しながら日本の価値観や美意識を体験出来る施設」へのコンバージョン。遺構は、ダムから山肌を流れ川縁の発電所まで続く。宿泊施設、ギャラリー、遊歩道等を備えた滞在型の施設で、建設されてからの100年の時の流れ・水の流れを同時に感じ、日本人特有の繊細な体験が

出来る。この施設以外に周辺には建物も人もいない。着眼点が素晴らしく、素直に行ってみたいと思わせてくれる。

遺構が大きく要素が多岐にわたっているからだとは思いますが、新設宿泊棟の計画についてもう一步踏み込んで欲しかった。

審査員 金山 美登利

⇒ 入選 ⇐ 「Architectural UPCYCLING—最終処分場から創作活動拠点へのリバース・コンバージョン—」 浅田 慎伍 (名古屋工業大学)



【講評】

「Architectural UPCYCLING」は、愛知県岡崎市の最終処分場及び採土場の2つの計画地を、アーティストたちの創作活動拠点として計画する提案である。この案が特徴的なのは、2つの計画地共に将来的には建築が消滅してしまうという点である。埋め立て地は、有機的な屋根に覆われた新築的空間の中に廃棄物がどんどん溜まっていき、空間

が埋め尽くされてしまう。一方採土場は、地形を型枠としたコンクリートから始まり、そのコンクリート下部を掘削することで空間が生まれる。しかし、採土が進むことで基礎が表出し、建築が崩壊してしまう。活動が消費を生む、建築あるいは人間の存在について、アイロニカルなメッセージが込められているように感じた。

審査員 葛島 隆之

⇒ 入選 ⇐ 「みまもりあいのミライ—元漁師町から次の世代へ—」 永井 里奈 (名古屋工業大学)



【講評】

古い街の裏路地などにみられた公私の曖昧さ(公有地の私物化や私有地の公的利用)を魅力ととらえ、これを拡張し、地域の活性化を目指す作品。

街区に点在する私有の空き家や空き部屋を一旦躯体表しとして可視化し、その後積極的に公的な場に変換して、かつて裏路地の道端で見られた活発なコミュニケーションを取り戻そうという試み

は大変魅力的でした。

ただ、リノベーションを行った空間をつなぐ新しい空中廊下設け、それを新しい裏路地と読み替えるというのは、街をショートカットして移動することにもなり、疑問に感じました。もともとある裏路地の良さ肯定するような方向性もあるのではないのでしょうか。

審査員長 渡辺 隆

受賞者の声

⇒ 金賞 ⇐ 「同窓会アパートメント—大学同窓会の再評価による新しいコミュニティのかたち—」



遠藤 あかり
(金城学院大学)

私の母校を対象に、同窓生が共に暮らす集合住宅を計画しました。少子高齢化やコミュニティの衰退など家族像が変化しつつある現代において、「同窓生」というつながりの持つ独特な共同体意識や信頼関係に着目し、生活共同体として再評価した新しい住まいのあり方を試考しました。

設計手法では、各住戸から窓を離すことによる「窓の共有」とそれによって形成される「窓辺」を手がかりに、天候

のようにコントロールできない環境が人々につながりをもたらすような、同窓生でしか実現し得ない空間を計画できたと感じています。

卒業設計の構想にあたりご指導してくださった先生方、支えてくれた同期、先輩、後輩の皆さんには、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

⇒ 銀賞 ⇐ 「山を建てる」



佐藤 直喜
(名古屋工業大学)

愛知県瀬戸市。かつてこの町の中心には山が存在した。陶土の採掘によって山が削られ、できた穴を囲むようにしてまちが形成した。長きにわたり、閉鎖されてきたこの穴は、土の組成により生物が介入できず、時間が止まっていた。ここに都市から発生した大量の残土が運び込まれようとしている。人工山再考。土の盛り方から、山、谷、稜線、頂上、開かれた山の部分を計画する。残土再編。土の組成か

ら土、ヒト、動物、植物、それぞれの空間を計画する。建築とランドスケープ。建築としての山、ランドスケープとしての空間を設計する。周囲のまちを緩やかにつなぐようにして新しい山を考える。

最後に、卒業設計を長きにわたり指導していただいた先生方、最後まで耳を傾けて深く受け止めてくださった方々に深く感謝申し上げます。

⇒ 銅賞 ⇐ 「循環する都市の履歴」



松井 宏樹
(名城大学)

大量消費社会の中で都市は個性を失い均質化しているのではないかという疑問から、街に個性に与える建築を目指して卒業制作を行ないました。

工業用地に残る未成線の鉄道高架を都市の骨格として捉え、街の廃棄物や余剰を地域の資源として循環させる装置へと変容させる提案をしました。廃棄物という人々の思い出や手垢のついた都市の履歴は人々の活動によって、街

へと戻っていく。そのような活動が街の新たな風景を生み出していくのではないかと考えました。

このJIA卒業設計コンクールでは、東海、全国ともに審査員の方々と長い時間議論ができ、ご指摘もたくさんいただくことができました。この機会を糧に、これからもこの卒制をブラッシュアップしていきたいと思います。この度は、貴重な機会をありがとうございました。

⇒ 銅賞 ⇐ 「水の循りで生まれる暮らしの環—上下水道から自立した都市の住まい—」



牛田 結理
(名城大学)

建築を4年間学んでいて感じたことは、建築は常に水との関わり方を問い直していかなければならないのでは?ということです。構造や環境、歴史など当たり前かもしれませんが、どの分野でも水が登場します。その水との関わり方を考える上で、現代の水利用の中心となる上下水道、地中に埋まる水インフラに対して、もっと建築は自立できるのでは?と考案制作を始めました。提案の内容としては、上下水道に頼らずに、建築が水を集めて暮らしの水として利用し、

その後は水を浄化し再利用または地中に浸透させるというものです。また、昔の水利用の暮らしに戻るのではなく、現代の技術があるからこそできる水の再利用の可能性も模索しました。

最後に、卒業制作を行うにあたりご指導してくださった先生方や支えてくれた同期、同級生、先輩方、後輩の皆さんに深く感謝申し上げます。

⇒ 銅賞 ⇐ 「庁舎建築再考」



神谷 尚輝
(名城大学)

従来のような閉ざされた区役所ではなく、官民をつなぐ役割として町に開かれ、需要や要望に柔軟に対応できるおらかな庁舎建築のあり方が必要だと考え卒業設計を行いました。本提案では、敷地として選定した中村公園北側にある廃れた競輪場に、豊かな神社の構成を延長しながら、各課を棟ごとに2年間隔でゆっくりと移転していきます。

周辺の環境や、庁舎移転に伴う地価向上などを踏まえな

がら各課を円形の自由に選択できる広場を作りながら移転をすることで、少しずつ地域との関係人口を増やし、町に定着していく。人が建築を使いこなすことで長期的に建て継がれるような建築を目指しました。

最後に、卒業設計を長きにわたり指導して頂いた先生方、先輩方、設計を支えてくれた同期、後輩の皆さんに深く感謝申し上げます。

審査に寄せて

■コンクール報告

第28回JIA東海学生卒業設計コンクール2023を開催し、7大学から16作品の応募がありました。

審査員長を渡辺隆さん、審査員を謡口志保さん、金山美登利さん、葛島隆之さん、塩田哲也さんに担っていただきました。

◇1次審査

非公開のオンラインで実施しました。応募作品を事前に読み込んだ上で、まずは各審査員がそれぞれ10票を投票しました。5票2作品、4票4作品、3.5票3作品、3票3作品、1票3作品、計15作品に票が入り、想定以上に票が割れたため、各作品について議論した上で、再度各審査員が重みづけをして投票しました。その結果、得点の多い上位10作品を2次審査に進めることに決定しました。

◇2次審査

今回は5年ぶりに会場に模型を持ち込み、対面での公開審査を行いました。1次審査通過者10名が5分間のプレゼンテーションと約10分間の質疑応答をしました。まずは審査員が各5票を投票し、5票1作品、4票4作品、2票2作品となりました。ここで上位5作品が明確に別れたため、4票以上獲得の5作品に対し、金・銀・銅の順位付けをする

ことになりました。各賞を決めるための熱い議論を経て、最後は各審査員が持ち点5点で重み付けをして投票を行い、最終的に、金賞1作品、銀賞1作品、銅賞3作品、入賞5作品を決定しました。そして、金・銀・銅の5作品をJIA全国学生卒業設計コンクールに出展することに決定しました。



▲受賞者のみなさんと審査員のみなさん

コンクール経緯

■応募:2023年4月10日~4月14日
東海地方の7大学16名が応募

■1次審査:2023年4月25日
非公開オンラインで審査し
10作品を2次審査に選出

■2次審査:2022年5月13日
対面とZoomウェビナー併用の
公開審査
金1作品・銀1作品・銅3作品
入賞5作品を選定

■コンクールを終えて

コロナが5類に引き下げられたこともあり、今年は5年ぶりに会場に模型を持ち込みでの対面公開で2次審査を開催しました。対面公開+リモート配信というこれまでにない試みのため、問題なく運営できるか心配しましたが、何とか無事に開催でき、心からホッとしています。

昨年のコンクールが成功に終わった実感があつた実行委員会としては、当初、昨年と同じ方法で審査をすることを想定していましたが、ところが、コロナが落ち着いてきたこともあり、2次審査は模型持ち込みでできないかという要望が審査員から出ました。実行委員会としては、いろいろクリアしなければならぬ課題はあるものの、応募者にとってより価値のあるコンクールとするために、模型持

ち込みでの審査とすることを決定しました。

まずは、模型を持ち込むことができ、公開審査が可能で、しかもリモート配信できる会場探しから始めました。なかなか条件に合致するところが思い当たりませんでした。JIA賛助会員であるTOTO様に相談させていただいたところ、快諾いただきました。

その他の準備にも相応の検討が必要だと覚悟していましたが、実際には場所は変われど多くの場面で昨年までの経験を活かすことができ、それほど大きな壁にぶち当たることはありませんでした。

そして、審査当日、持ち込まれた10作品の模型を見て、やはり紙面だけから伝わるものとは圧倒的に差があり、応募者の作品に懸ける熱意の伝わり方も違つたと実感しました。審査においても質疑応答は模型を目の前に行われ、より深い議論ができたと思います。応募者同士も他の作品を見ることで、多くの刺激を得たのではないのでしょうか。

審査員と実行委員の数か月にわたる周回準備のおかげで、コンクールを無事に開催できました。また、審査員のみなさんの白熱した議論により、とても内容の濃い審査になり、コンクールとしての成果を残すことが

できました。この場を借り、審査員のみなさん、大瀧支部長、上原さん、矢田さん、澤さんはじめ委員の皆さんに感謝申し上げます。また、無償で会場をお貸しいただき、土曜日にも関わらず会場準備のお手伝いもいただいたTOTO様には感謝しかありません。さらに、本コンクールの趣旨に賛同いただき、協賛いただいた皆さまにもこの場を借りてお礼を申し上げます。

この3年間、一定の成果を上げることができたと思いますが、まだまだ改善の余地は多くあります。その改善のためには、より多くのみなさんの知恵と熱意が必要です。「将来を担う学生の力になりたい!」、「なんか面白そう!」など、どんな動機でも構いませんので、実行委員として運営に関わってみませんか?建築の質の向上と建築文化の発展のために、この地域の学生の成長を支えるこのコンクールを継続させ、更に価値のある活動に発展させるために、みなさんの力添えが必要です。よろしくお願いたします!



奥井 康史 (JIA愛知)

東海卒コン2023 実行委員長



▲2次審査は模型を持ち込み、公開で開催

水都大阪の歴史と今をめぐる旅 -中之島周辺散策-

●開催日:2023年7月8日

今にも降り出しそうな空のもと、関ドライブインをバスは出発した。大半は津駅東口から乗り込んだ三重地域会の面々である。私を含め数人の会員は関での合流組だ。久々の“ウォッチング”とあって、大型バスは満席とまではいかないが、結構な参加者だ。

最初の目的地“万博記念公園”までは、てっきり名阪国道～西名阪・・・と勝手に思い込んでいたが、バスは関から東へと向かう。どうも亀山から新名神経由という事らしい。行程に余裕が無らしく、途中のトイレ休憩もなくバスは突っ走る。

お子さん連れの参加者もいて、車内は終始参加者たちの和やかな会話が続けていたが、やはり“けじめ”をつけなくてはと、地域会長森本雅史さんの挨拶が始まり、続いて、ウォッチング幹事の相原裕康さんの行程説明。ユーモア溢れる挨拶に拍手喝采・・・

やっぱりバスの旅は楽しいな、なんて思っているうちにバスは高速道路を降りて大阪の街に入り、万博公園が近づいてきた。目に飛び込んできたのは、久しぶりの“太陽の塔”だ。“大阪万博”を経験した年代にとってはやはり懐かしさがこみ上げてくる。

まずは腹ごしらえ、ということで徒歩で昼食会場へ。お昼は“森の洋食 グリルみんぱく”だ。黒川紀章設計の国立民族学博物館の中にある洋食レストランだが、早く着きすぎたようで、まだ準備が出来ていない。時間待ちに博物館を見学でもしようか・・・

そうこうしているうちに準備も整い、楽しい昼食の時間となりました。お昼もウォッチング



の楽しみの一つで、幹事さんは中々気を遣うものです。おいしい食事をありがとうございました。会話ははずみ、楽しい時間を過ごすことができました。

食事のあとは、いよいよ楽しみにしていた“太陽の塔”特に“生命の樹”の内部見学だ。大阪万博開催当時にあったらしいが、全く記憶がない。アメーバから人間への進化を表しているようだが、単なる“生命進化模型”ではなく、“根源から未来に向かってふきあげる「生命のエネルギー」”を表現しているらしい。岡本先生は難しい。理解できない。しかし最上階の6階(?)までアツという間に昇っていた。

続いては、中之島までのバス移動、目的の中心は安藤忠雄設計寄贈の“こども本の森 中之島”。「こどもたちに多様な本を手にとってもらい、無限の創造力や好奇心を育てて欲しい。自発的に本の中の言葉や感情、アイデアに触れ、世界には自分と違う人や暮らしが在ることを知ってほしい」というそんな想いで造られたという。土曜日という事もあって、けっこう人で溢れている。こどもたちが、通路や階段などそこらじゅうで座って本を読んでいる。天気の良い日は外で読んでもいいという。実際、外で読んでいる子ども何人かいる。管理する方は

大変だな、と思いつつ、寄贈した安藤忠雄の想いが形になっているんだなと感じた。

折角なので、見学の終わりに参加者全員揃って建物前で記念撮影をして、あとは中之島自由散策、集合場所は最後の水上クルージング乗り場。周辺には“中央公会堂”“中之島美術館”など見どころはたっぷり。若者グループ、年寄りグループ(失礼!)、家族グループ、などに分かれて、皆さんいったいどこへ行ったのでしょうか?

ウォッチングの締めくくりは“お楽しみ、水上クルーズ”、三々五々、クルージング乗り場の“大阪城港”に集まってきた。ほぼ貸し切り状態でクルーズスタート。4.5分程度のクルージングだが、低い位置から見るビル街はまた違った雰囲気面で面白いものだ。「やれ大阪城」だの「やれどこそこのビル」だの、ワイワイやっているうちに、船は“大阪城港”に帰ってきた。

楽しい時間はアツという間に過ぎ、あとはバスに乗って帰るのか、と寂しい気持ちになってくる。久々の“建築ウォッチング”に名残惜しさを感じながら、企画してくれた皆様に感謝する一日でした。

松本 正博 (JIA三重)
上野建築研究所



国立民族学博物館



万博記念公園 (太陽の塔)

名鉄蒲郡線 西浦駅待合所 学生コンペ

コンペの概要

本コンペは、愛知県蒲郡市が、「がまごおり公共建築学生チャレンジコンペ2023」と題し、『電車待ちだけじゃないみんなで使うまちの待合所』をテーマとして建築を学ぶ学生を対象とした実施コンペです。

コンペの主旨は募集要項に以下のよう
に記されています。『名古屋鉄道蒲郡線の西浦駅は、1936年に開業しました。学生や高齢者をはじめとした地域住民だけでなく、観光地西浦温泉を訪れる観光客も利用する西浦の玄関口です。そこには待合所を併設した駅舎が設置され、多くの方に利用されてきました。どこことなくホッとするような佇まいの駅舎は、いつまでも懐かしい、いつまでも愛される存在でありました。しかし、昭和24年に改築された駅舎は施設の老朽化のために取り壊されることになり、令和4年秋、多く

の人に惜しまれながら、73年間の長い歴史に幕を閉じました。このまちに住む人は、西浦駅を通して時代を過ごしてきました。かつての駅舎が取り壊されてしまった今、西浦駅は待合所を必要としています。いつまでもありつづけて欲しいと願うまちの思い。思いを乗せた提案を求めます。』

対象建築物は名鉄蒲郡線西浦駅前に、蒲郡市の公共施設としてトイレを併設した駅待合所を新築する計画です。建物は、木造平屋建て、床面積 約60㎡、所要室は待合室、男子トイレ、女子トイレ、多目的トイレです。

審査委員長に古谷誠章(建築家・NASCA代表・早稲田大学教授)、審査委員に安井秀夫(建築家・株式会社安井秀夫アトリエ代表取締役)、恒川和久(名古屋大学大学院教授)、伊藤隆一(itoto architects 代表)とし、キックオフイベント

を4月2日、一次審査を6月11日、最終審査を6月25日に行いました。提案数は全国の大学、大学院、専門学校等から、377作品(延べ746人)にも及びました。

キックオフイベントは蒲郡市民会館で開催し、『未来を拓く 君たちへ』と題し、西浦の町の紹介を関係者が行い、審査委員が学生への期待を語るパネルディスカッションを行いました。

一次審査は377作品の中から会場に持ち込んだ提案者(郵送を選択した提案者はパネル展示のみ)のパネル250作品を展示し、全提案パネルを1組30秒で審査員にプレゼンテーションしていく方式を取りました。市民会館のホールに、一般の参加も含め500名以上が集まる熱気の中で終日審査が行われました。

最終審査は一次審査で選ばれた6組のプレゼンテーションを西浦公民館にて行いました。提案者は一次審査のパネル



一次審査風景



一次審査会場風景



審査委員長 古谷誠章氏



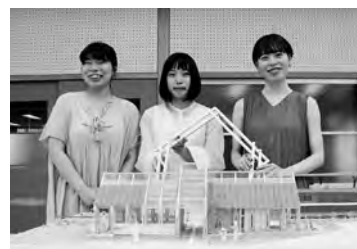
建設予定地



最終審査参加者と審査員と蒲郡市長



最優秀作品賞



最優秀案グループ



佳作賞



佳作賞



優秀作品賞



優秀作品賞



佳作賞

に加え、模型(1/30)、プロジェクターを使用し、より具体的に提案を行いました。審査は公開形式で行われ、会場には地元の方も多く参加されました。白熱した議論の結果、横浜国立大学大学院の野中美奈さん、大月菜子さん、飯島あゆみさんの『風透る屋根の下で』が最優秀案に選ばれました。

審査について

一次審査は377作品の中から6作品を選出するというきわめて厳しい絞り込みをする中、実施コンペという事で、学生のアイデアに加え、実際に予算内で建築が可能かどうかという点も大きな議論の対象となりました。また1組30秒という限られた時間でプレゼンをする中で、アイデアを的確に審査員に伝えることが求められました。

最終審査は一次審査に比べより具体的な視点での提案がされ、構造、予算の範囲まで議論が広がりました。

西浦と今後について

蒲郡市の西浦半島に位置する西浦町は、海と山に囲まれ、西浦温泉、漁業を中心とした静かな街です。海との距離が近く、海風や海の匂いが心地良く感じられる場所です。近年は人口減少が顕著であり、鉄道での観光客も減少しています。

もともと存在した西浦駅の待合所は集いの場として地元民に愛される存在でした。老朽化にあたり解体が決まり多くの人々からは悲しみの声が上がりました。

本コンペでは、地元民や、観光客に永く愛される待合所を建設すべく、まちの象徴であり、居心地の良い場としての待合所が求められました。現在、電車の待

合、集いの場、観光の玄関口など、様々な用途を担う西浦の待合所とすべく、当選した学生、蒲郡市役所、協力設計事務所と連携し、実施設計を進めています。

学生のアイデアをベースに、実際に建築する上での法規制、構造、仕様等の打合せを重ね、学生の提案にあった美しい構造体を表現すべく様々な方法を模索し、2024年3月竣工を目指しています。

なお、審査結果の詳細は、下記QRコードより、蒲郡市にHPにてご覧いただけます。

※QRコードは(株)デンソーウェーブの登録商標です



伊藤 隆一
itoto architects

猪垣は旧額田町南部地域を流域とする男川上流の山深い里にあり、今なお原形を保ちながら保存されている。この地区にはこの代表的な「万足平の猪垣」をはじめ実に60kmにわたり猪垣が構築されているという。

以前、TVでこの猪垣を見て以来、一度は訪ねてみたいと思っていたが、実際にこの地を訪れてみると里山の中に万里の長城のようにうねうねと続く石垣は圧巻であった。

山深く田畑の狭いこの地区に暮らす農民にとって、幕府に収める上納米や飢饉ばかりでなく、貴重な作物を荒らす動物たち(猪や鹿)にも悩まされていた。特に猪による被害は甚大で、

その対応に苦しんだ末に農民たちの手で生み出されたという。

猪垣の素材となったのは、男川流域でとれる片麻岩で、平らな板状に割れやすい岩を平らに割って1.6~2mの高さまで積んでいく。猪垣の底幅は約1mに対して上部は0.6mの台形にしている。さらに山側の下部に「根石」を置き、猪や鹿がヒズメをかけにくいように工夫している。また、山側は幅1m程度の溝を作り、石材運搬に使用するのに加え、動物が飛び越え難くようにしている。さらに、道路を支える法面に丸太を縦横に組んで土留めにしているのも見どころである。



【概要】

所有者：万足平を考える会
建設年：江戸時代後期の文化2年(1805)及び天保3年(1832)
構造：石積(黒雲母片麻岩)
規模：高さ2m、上面0.6m、底幅1m、延長612m
問合せ先：岡崎市教育委員会 通常見学可(無人)
アクセス：新東名高速道路「岡崎東IC」より約10km
文化財指定等：愛知県指定文化財(有形民俗文化財) 昭和56年2月23日指定
参考文献：岡崎市教育委員会HP、シシガキ研究会HP
住所：愛知県岡崎市中金町万足平



谷村 茂 (JIA 愛知)

アール・アンド・エス 設計工房

編集
後記

●久しぶりに8頁増の16頁、頁数縮小以前のボリュームの号となりました。卒コンと西浦

駅のコンペ、学生に関わる活動を掲載しています。全国コンクールにつながる卒コンは、他大学の学生と知り合える良い機会だと思っています。より多くの学生の関わるものになってほしいです。西浦駅のコンペは全国から多数の参加があって有意義なコンペとなったように思います。実際に模型を持ち寄り対面で案を審査することにより建築を共に考える楽しさのある雰囲気を感じました。

コロナ禍がひと段落して対面で会う機会が増えてきました。リモートでは得られなかった雑談の楽しさや話題の広がりを感じています。リモートの利点も見つけられましたが、対面でや

らなかったことの成果に対する評価もそろそろ出てくるかと思えます。そのようなテーマを絞った特集や地域会を特集した増頁号も復活させていきたいと思えます。(服部 昌也)

●今月号は、学生に関わる記事が二本あり、見応えある内容となっています。卒コンは、16作品と応募数は例年に比べ、少なかったように思われますが、誌面からは中身がとても充実していることが十分に伝わって来ます。また、5年ぶりに模型を持ち込んでの対面公開で2次審査を行ったとのことで、審査会も白熱したことはないだろうか。

もう一つの「西浦駅待合所 学生コンペ」は、実施コンペということもあり、全国から377作品(746名)もの応募があったようです。こちらも、模型を持ち込んでの公開2次審査会が行われ、同じく白熱した審査会だったことでしょう。どちらも模型を持ち込んで、対面での審査会

が行われています。徐々にですが、日常が戻りつつあることを感じますが、まだまだ気の抜けない日々も続きます。みなさま、万全の体制で秋の全国大会を迎えましょう。(矢田 義典)

ARCHITECT

第420号

発行日 2023.9.1 (毎月1回発行)

定価 380円(税込み)

発行責任者 大瀧正也

編集責任者 恒川和久

編集 東海支部会報委員会
愛知地域会ブリテン委員会
株式会社イヅミ内

ARCHITECT 編集部

岡崎市明大寺町荒井10番地

TEL (0564)21-2657 FAX 26-1792

発行所 (公社)日本建築家協会東海支部

名古屋市中区栄4-3-26 昭和ビル

TEL (052)263-4636 FAX 251-8495

E-Mail : shibu@jia-tokai.org

http : //www.jia-tokai.org/

残暑お見舞い申し上げます

(静岡・愛知・岐阜・三重地域会 五十音順)

<p>(有)聖建築設計事務所</p>  <p>代表取締役 大瀧 正也</p> <p>〒424-0923 静岡市清水区幸町10-38 TEL: 054-334-2654 FAX: 054-334-6468</p>	<p>(株)伊藤建築設計事務所</p> <p>取締役相談役 森口 雅文 代表取締役社長 小田 義彦</p> <p>〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-15-15 桜通ビル TEL: 052-222-8611 FAX: 052-222-1971</p>	<p>(株)城戸武男建築事務所</p> <p>代表取締役 城戸 康近</p> <p>〒460-0002 名古屋市中区丸の内2-11-23 富士和ビル2F TEL: 052-231-5451 FAX: 052-231-5450</p>
<p>(株)三和建築事務所</p> <p>取締役社長 見寺 昭彦</p> <p>〒455-0015 名古屋市港区港栄4-5-5 TEL: 052-661-2211 FAX: 052-661-2247</p>	<p>一級建築士事務所 デザイン スズキ</p>  <p>鈴木 利明</p> <p>〒440-0012 豊橋市東小鷹野4-4-8 TEL: 0532-61-4245 FAX: 0532-61-4215</p>	<p>(株)中建築設計事務所</p> <p>代表取締役 廣瀬 高保</p> <p>〒460-0007 名古屋市中区新栄1-27-27 TEL: 052-262-4411 FAX: 052-262-4414</p>
<p>森建築設計室</p>  <p>森 哲哉</p> <p>〒468-0007 名古屋市天白区植田本町2-812-1 TEL: 052-807-3205 FAX: 052-807-3206</p>	<p>(株)ヤスウラ設計</p>  <p>代表取締役 水野 豊秋</p> <p>〒460-0007 名古屋市中区新栄2-35-6 TEL: 052-241-7211 FAX: 052-241-7333</p>	<p>(株)ワークキューブ</p> <p>桑原 雅明 吉元 学 平野 恵津泰</p> <p>〒460-0024 名古屋市中区正木1-13-14 TEL: 052-265-8412 FAX: 052-265-8402</p>
<p>内田建築設計事務所</p> <p>内田 実成</p> <p>〒501-0514 揖斐郡大野町西方北野口791 TEL: 0585-34-3508 FAX: 0585-34-3509</p>	<p>日新設計(株)</p> <p>代表取締役 出口 基樹</p> <p>〒514-0038 津市西古河町20-18 TEL: 059-227-7421 FAX: 059-225-7854</p>	<p>(株)森本建築事務所</p> <p>代表取締役 森本 雅史</p> <p>〒518-0623 名張市桔梗が丘3番町2街区68-4 TEL: 0595-65-2638 FAX: 0595-66-2639</p>
<p>DNライティング(株)</p> <p>名古屋営業所長 原田 眞志</p> <p>〒460-0002 名古屋市中区丸の内3-13-1セプトン丸の内ビル8F TEL: 052-265-9968 FAX: 052-265-9969</p>		

JIA本部総会報告

2023年6月23日(金)建築家会館1階大ホールにおいて「2023年度通常総会」が開催されました。

佐藤尚巳会長の挨拶に続き、渡邊大海理事が議長に選任され議事が開始されました。

■議事

- 第1号議案:2022年度貸借対照表及び損益計算書(正味財産増減計算書)財産目録の承認の件……………承認されました。
- 第2号議案:準会員・協力会員の入会金・会費一部改正の件……………承認されました。
- 第3号議案:理事及び監事の選任の件……………承認されました。
- 第4号議案:名誉会員選任の件……………承認されました。

■報告事項

2022年度事業報告、2023年度事業計画及び予算について報告がありました。



佐藤尚巳 会長



総会風景

以上をもって無事総会は閉会となり、その後、任期を終了した本部署の皆さんに感謝状が贈呈されました。

まだまだコロナ禍に配慮した開催となりました。参加者は新旧本部署理事と監事の出席となり、コロナ前の様子とまではいきませんでしたが、今後を見据えた有意義な総会であったと感じております。

JIA東海支部支部長 **大瀧 正也**

JIA建築家大会2023東海in常滑は、建築家大会ウィークと本大会の2部構成で開催。

建築家大会ウィークとは

「JIA全体でつくる建築家大会」を目指して、本大会前の約4週間、webを中心に開催するシンポジウムや各種会議によるイベントです。

この企画は、JIAの各支部、各委員会に参加を呼びかけ、全国大会をJIA全体でつくりあげる取り組みの一貫です。地方での全国大会開催は、人的動員やコストも含め、持続的に運営できるのか検討の時期にきていると思います。大会のつくり方に支部を横断したつくり手がいいることで、主体者が増え、地方負担が減り、大会が盛り上がるための建築家大会ウィークです。本大会との関連企画もあり、充実してきました。

期間は10月12日から11月8日までの4週間。初日の12日は18時から開会挨拶を皮切りに、住宅等連携会議主催のシンポジウム「建築家、風土をデザインする」。その他、シンポジウム「これからの資格制度を考える」(理事会+職能・資格制度委員会+建築家資格制度実務委員会 共催)、「震災から10年、繋ぐを振り返る」(東北支部主催)、「脱経済成長とコモンを捉えた建築まちづくり/地球環境と幸せを考える」(まちづくり会議+関東甲信越支部建築まちづくり委員会主催)など。本大会と連動する「注目の若手建築家による建築討論(仮)」(10

支部合同企画)、「(仮)これからの建築家としての在り方を再考する」(東海支部企画)他。建築家大会ウィークは、JIA全体でつくり出す呼びかけに多くの賛同を頂き、隙間なく開催されます。webによる企画ですので、気軽に参加してください。

※その他のプログラム開催日はカレンダーを御覧ください(現在調整中のものもあり、変更になることがあります。)

本大会について

大会初日 11月9日(木)のプログラム 常滑の街をめくって

少し早く常滑へ来ていただき、街を歩いて、感じてほしい。常滑駅からメイン会場の「常滑市民文化会館」までは、ゆっくり歩いて10分ほど、受付を済ませて、そこから東に広がる、「やきもの散歩道」エリアを散策してください。このあたりは、丘陵地帯で窯をつくるのに適していることが理解できます。産業構造の変化により、使われなくなった窯のあとや、繁栄の痕跡を感じ、「旧青木製陶所」へ、ここでは全国10支部企画である若手建築家の討論会を開催します。テーマ「環る」について、自身の作品を使いプレゼンテーションのあと、モデレーターを入れてクロストークとなります。モデレーター役はJIA新人賞受賞者が行います。この企画は、

本大会前の建築家大会ウィークで3回のシンポジウムを行ったあと、本大会の常滑ですべての登壇者が集い総括議論します。

街を歩きながら、メイン会場の「常滑市民文化会館」に戻り、シンポジウム「西尾市生涯学習センターコンペ」についてが開催されます。JIA東海がコンペ要項、審査委員の選定など業務委託を受けて運営している企画です。JIAの行政に対する役割がしめされた好事例。本大会までには、当選案も確定しています。建築的な魅力も楽しみなシンポジウムです。

同時刻になりますが、復活した「建築家のあかりコンペ」。こちらは、旧青木製陶所で二次審査を開催します。廃窯の陰影が強い木造建屋で開かれる「あかり」公開審査は、光と闇の空間で繰り広げられます。

その後、やきもの散歩道へ戻り、「旧丸利陶管」にて、JIA東海企画「(仮称)これからの建築家としての在り方を再考する」が開催されます。この企画も建築家大会ウィークとの連動企画です。東海の若手建築家が、建築の行為について、自らの営みについて、未来の建築家像について討論する企画です。若き建築家たちが、今、何を思い、将来どうすべきかを聞いてみましょう。

次に、「INAXライブミュージアム」に向かいます。街を見ながら歩くと30分ほどで到着します。(歩かれない方は循環バスをご利用ください。)ウエルカムパーティ会場となります。

パーティが始まるまで、INAXライブミュージアムを見学できます。私のおすすめは、建築陶器のはじまり館と窯のある広場。フランク・ロイド・ライトの帝国ホテル柱が展示。屋外展示スペースにある、解体されて移設したテラコッタ類は展示の方法にも注目です。窯のある広場には、建築写真家の山田脩二さん(現在は瓦職人「カワラマン」に転身)の撮影された、土管の生産最盛期の常滑を見ることができます。他にもタイトル

◇建築家大会ウィークカレンダー (2023年 8月18日現在※随時更新中)

月	火	水	木	金	土
10/9	10/10	10/11	10/12 18:00~20:00 開会挨拶 シンポジウム 住宅等連携会議 「建築家、風土をデザインする」	10/13 15:00~17:00 法人協力会 プレゼンメント	10/14
10/16 18:00~20:00 シンポジウム 理事会+職能・資格制度委員会 +建築家資格制度実務委員会 共催「これからの資格制度を考える」	10/17	10/18 18:00~20:00 全国10支部合同企画 (第1回/全3回) 「注目の若手建築家による建築討論」	10/19	10/20 19:00~20:30 シンポジウム 東北支部 震災から10年企画 「繋ぐつなぐを振り返る」	10/21 13:00~18:00 シンポジウム 審査 兼知建築士会名古屋北支部 建築コントロール「きよら建築」
10/23 18:00~20:00 シンポジウム JIAグローバルニューアープ /国際委員会 「JIAグローバルニューアープJIA 受賞発表会」	10/24 13:00~15:00 建築相談連携会議 「各支部の相談活動と課題」	10/25 18:30~20:30 シンポジウム まちづくり会議+関東甲信越支部 建築まちづくり委員会 「脱経済成長とコモンを捉えた建築まち づくり/地球環境と幸せを考える」	10/26 14:00~17:00 講演会 保存再生会議 「(仮題)近現代の歴史的建造物の 継承を担う職能」	10/27 18:00~20:00 全国10支部合同企画 (第2回/全3回) 「注目の若手建築家による建築 討論」	10/28 18:00~20:00 シンポジウム 関東甲信越学生の会 @joint
10/30	10/31 19:00~21:00 東海支部 若手建築家企画 (仮)これからの建築家としての 在り方を再考する	11/1 18:00~20:00 JIA-KIT 建築文化継承機構 「偉大な先輩建築家に学ぶ」	11/2	11/3 18:00~20:00 全国10支部合同企画 (第3回/全3回) 「注目の若手建築家による建築 討論」	11/4
11/6	11/7	11/8	11/9 大会1日目	11/10 大会2日目	11/11 大会3日目

ミュージアムなど見どころ満載です。ほぼ同時に常石神社から山車が曳かれてきます。これに合わせて、ウエルカムパーティを開催します。パーティでは、JIAバンドによる演奏や各種演目で、初日のプログラムは終了します。

大会2日目 11月10日(金) 「環る」を深める

午前中は各種会議によるシンポジウムが開催されます。詳細は今後、発表されるHPなどを御覧ください。

13時から、常滑市民文化会館にて「大会式典」「メインシンポジウム」となります。

メインシンポジウム

メインシンポジウム登壇者のひとり、井上博成さんを紹介します。

高山市の出身の33歳、京都大学院生。宮大工の祖父、建築工務店を営なむ家に生まれ、京都大学で経済学を学び、「理論(学問)と実践(事業)・対話」がループすることの重要性を知り、森林を中心に地域に多様な自然資本があることに着目、木質バイオマスや小水力発電などの自然エネルギー事業の展開、さらに直接的な林業への事業拡大へと地域の森林を価値化する事業を起業し実践に移行しています。現在は不動産、金融へと展開させながら、地域の森林から始まる事業展開も拡大中です。

これらの活動は、地域資源価値の見直しと、起業的発想、事業継承の重要性などを深く追求しています。今話題の飛騨高山大学の設立について、本人は高校時代からの夢でこの地域に大学をつくりたかったそうです。家業で実践している新たな価値を創造する「共創」をテーマに人材育成を目指します。すでに設立の資金集めは大詰めのように、大学及び周辺施設の設計は建築家の藤本壮介氏が担当、実施設計をすすめ2026年4月の開学を目指しています。そんな、若き起業家と言っていい井上博成さんを迎え



◇タイムスケジュール(2023年8月18日現在※随時更新中) ※各プログラム内容・日時は変更になる可能性がありますのでご了承ください。

11月9日	10日
9:00 9:00-18:00 総合受付	9:00 シンポジウム 西尾市コンベンから見えてくる、建築設計者の資格の持家家(シンポジウムを兼ね、改めて考える) ◆旧青木製陶所 9:00~10:30 災害対策会議 シンポジウム ◆常滑市民文化会館 2階視聴覚室 9:00~10:30 国際委員会 シンポジウム International Presidents' Forum 9:30~11:30
10:00 街歩き(自由) やきもの散歩道等	10:00 街歩き(自由) やきもの散歩道等
11:00 まちづくりワークショップ企画 まち歩き 常滑の「たから」と「あきら」 ◆常滑市民文化会館 10:30~12:45 (ランチミーティング含む)	11:00 シンポジウム JIA-RTアーカイブス「偉大な先輩建築家に学ぶⅧ」 ◆常滑市民文化会館 2階会議室 10:30~12:15
12:00 注目の若手建築家による建築討論 シンポジウム ◆旧青木製陶所 10:30~12:00	
13:00 西尾コンベンシンポジウム ◆常滑市民文化会館:大ホール 13:00~15:00 基調講演:山本理顕 パネリスト:伊藤恭行、加茂紀和子、鈴木貴之、恒川和久	大会式典 ◆常滑市民文化会館:大ホール 13:00~13:50
14:00 街歩き(自由) やきもの散歩道等	メインシンポジウム ◆常滑市民文化会館:大ホール 14:00~17:00 モデレーター 建築家 古谷誠章 パネリスト 飛騨高山大学理事・起業家 井上博成 INAXライブミュージアム学芸員 後藤泰男 陶芸研究所学芸員・考古学者 小栗康寛
15:00 JIA参加者 特別見学 ◆INAXライブミュージアム 16:00~18:20	名譽会員の集い ◆愛知県国際展示場 Aichi Sky Expo M 1会議室 17:30~18:00
16:00 山車曳き 17:00~17:50	
17:00 ウエルカムパーティー ◆INAXライブミュージアム 18:30~20:30	レセプションパーティー ◆愛知県国際展示場 Aichi Sky Expo L3~L6会議室 18:30~20:30
18:00 2次会 ◆常滑市内各所 21:00~23:00	
19:00 法人協会サミット ◆陶磁器会館3階 会議室 15:00~17:00 支部長OB会 ◆INAXライブミュージアム 陶芸工房 16:00~17:30 環境会議 ◆INAXライブミュージアム どんぐり館 16:00~17:30	保存再生会議 拡大定例会 ◆陶芸研究所 10:00~11:30 支部役員会近畿支部 12:00~13:00 支部役員会四国支部 12:00~13:00

11月11日【エクスカーション】

て、メインシンポジウムを開催します。

その他の登壇者、モデレーター役に建築家古谷誠章氏。常滑からは2名登壇します。タイル復元の実績が豊富で、東京駅丸の内駅舎、早稲田大学大隈講堂、岡本太郎のタイル壁画の復元などを手掛ける、INAXライブミュージアム学芸員後藤泰男氏。そして、考古学を学び、やきものに精通しており、中でも堀口捨己作品の「陶芸研究所」を通して、堀口建築も語る事ができる、とこなめ陶の森 学芸員 小栗康寛氏です。

シンポジウムの前半は、これらの登壇者が5枚のスライドを使って、テーマ「環る」について語ります。それぞれ異なる活動分野から、どのような展開になるのでしょうか。

後半は常滑をよく知る人、地方での価値を創出している人、そして建築家によるクロストークです。モデレーターの古谷氏に議論を深めてもらい、地方におけるまちづくり

- ・知多周遊コース
- ・岐阜コース
- ・静岡コース
- ・愛知コース
- ・三重コース

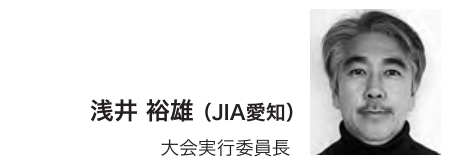
や地域の価値の創造に寄与できるシンポジウムを目指します。

レセプションパーティ

会場は空港島にある「愛知県国際展示場」です。移動は常滑駅から名鉄電車で。

本大会の会場は3つのエリア ①常滑市民文化会館、やきもの散歩道エリア ②INAXライブミュージアム、陶芸研究所エリア ③空港島内 愛知県国際展示場エリアとなります。

注意:タイムテーブルやコンテンツは調整中のものあり、変更になる場合もあります。最新の情報はHPを通して公開していきます。



浅井 裕雄 (JIA愛知)
大会実行委員長